野黒坂遺跡 II

筑紫野市大字針摺所在遺跡調査

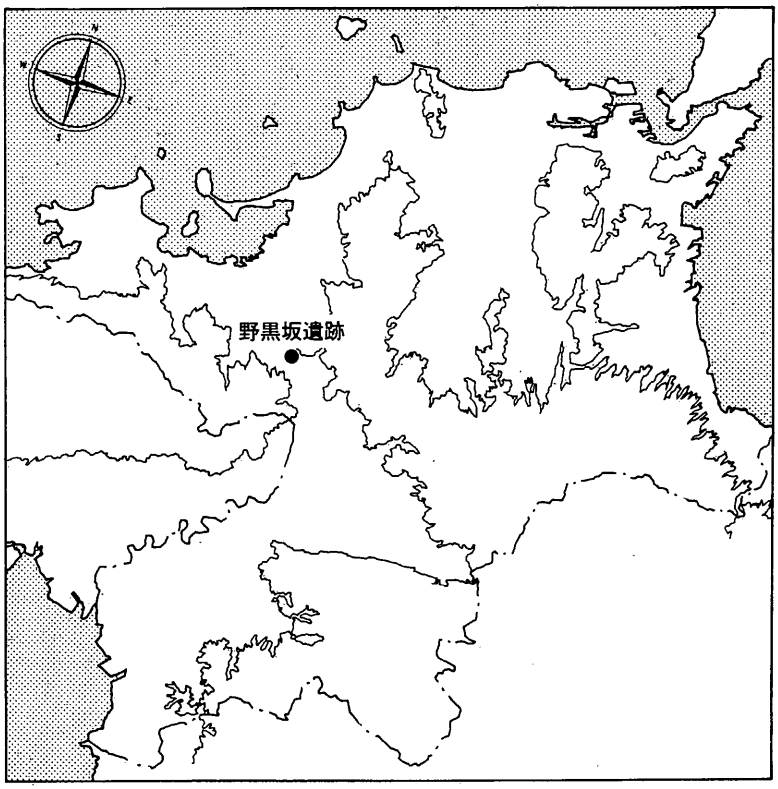
筑紫野市文化財調査報告書

第 40 集

1 9 9 4

筑紫野市教育委員会

野黒坂遺跡 II



序

本書は、宅地開発事業に伴って実施した野黒坂遺跡の第２次調査の記録であります。

筑紫野市では、近年福岡都市圏のベッドタウンとして新しい甍が建ち、日々様変りをしております。

これにともなって数多くの埋蔵文化財の発掘調査が実施されてきましたが、日々調査に追われ膨大な遺物や図面の整理・報告が遅れているのが現状です。

私共の役割は、先人達の残してくれた文化的遺産を保護し、後世に伝えていくことであり、それらの成果を少しでも早く報告したいと努力いたしております。

発掘調査ならびに報告書作成にあたり、御理解、御協力いただきました関係各位に心から厚く御礼申しあげるとともに、本書が埋蔵文化財保護の御理解を深める一助となり、合せて研究資料として御活用いただける事を願うものです。

平成６年３月31日

筑紫野市教育委員会
教育長　永渕正敏

例　言

1．本書は筑紫野市大字針摺539−12に所在する野黒坂遺跡の第2次調査の記録である。
2．この遺跡は当初、大曲り遺跡に含まれるとしていたが、再度の確認によって野黒坂遺跡の一部と考えたため、名称を大曲り遺跡第2次調査から野黒坂遺跡第2次調査に改めた。
3．調査に係る遺構実測および報告書作成の遺物実測・製図は渡邊和子が行なった。
4．遺物復原および整理作業には、山内妙子・松尾敦子が従事した。
5．本書掲載の遺構写真は渡邊が、遺物写真はフォトハウスオカに委託し撮影した。
6．挿図中の北は磁北を示す。
7．遺物の挿図番号と図版番号は同一であり、遺物写真の大きさは不統一である。
8．執筆、編集は渡邊が行なった。

題字は教育委員会・平嶋陽子氏による

本　文　目　次

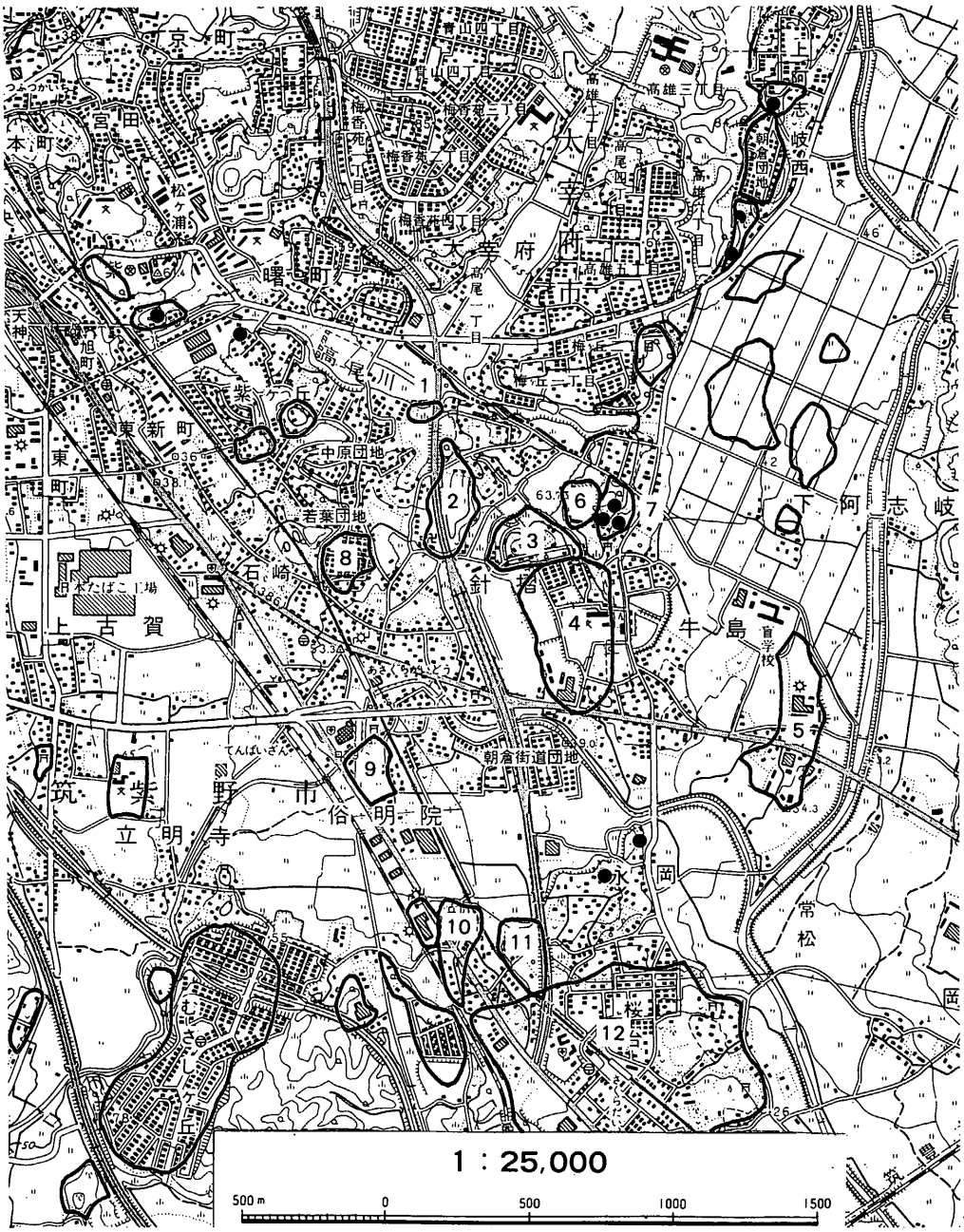
頁
Ⅰ．調査に至る経過 …… 3
Ⅱ．位置と環境 …… 3
Ⅲ．調査の内容 …… 4
　1．住居跡 …… 4
　　出土遺物 …… 4・6
　2．その他の遺構 …… 6
　　出土遺物 …… 7
　3．包含層の遺物 …… 7
Ⅳ．まとめ …… 7

挿　図　目　次

Fig. 1　周辺遺跡分布図（S 1/25,000） …… 1
Fig. 2　調査地点位置図（S 1/2,500） …… 2
Fig. 3　住居跡実測図（S 1/60） …… 5
Fig. 4　出土遺物実測図（S 1/1・1/3） …… 5
Fig. 5　その他の遺構実測図（S 1/60） …… 6
Fig. 6　出土土器実測図（S 1/3） …… 6
Fig. 7　包含層出土土器実測図（S 1/3） …… 7
付図　野黒坂遺跡Ⅱ　遺構配置図（S 1/100）

図　版　目　次

PL. 1　全景写真
PL. 2　ピット群近景および住居跡
PL. 3　その他の遺構
PL. 4　その他の遺構
PL. 5　出土遺物
PL. 6　出土土器



1．大曲り遺跡　2．野黒坂遺跡　3．イカリノ上遺跡　4．峠山遺跡
5．宮崎遺跡　6．上ノ浦遺跡　7．上ノ浦古墳群　8．針摺遺跡
9．俗明院遺跡　10．竹敷遺跡　11．永岡遺跡　12．常松遺跡

Fig. 1　周辺遺跡分布図（S 1 /25,000）

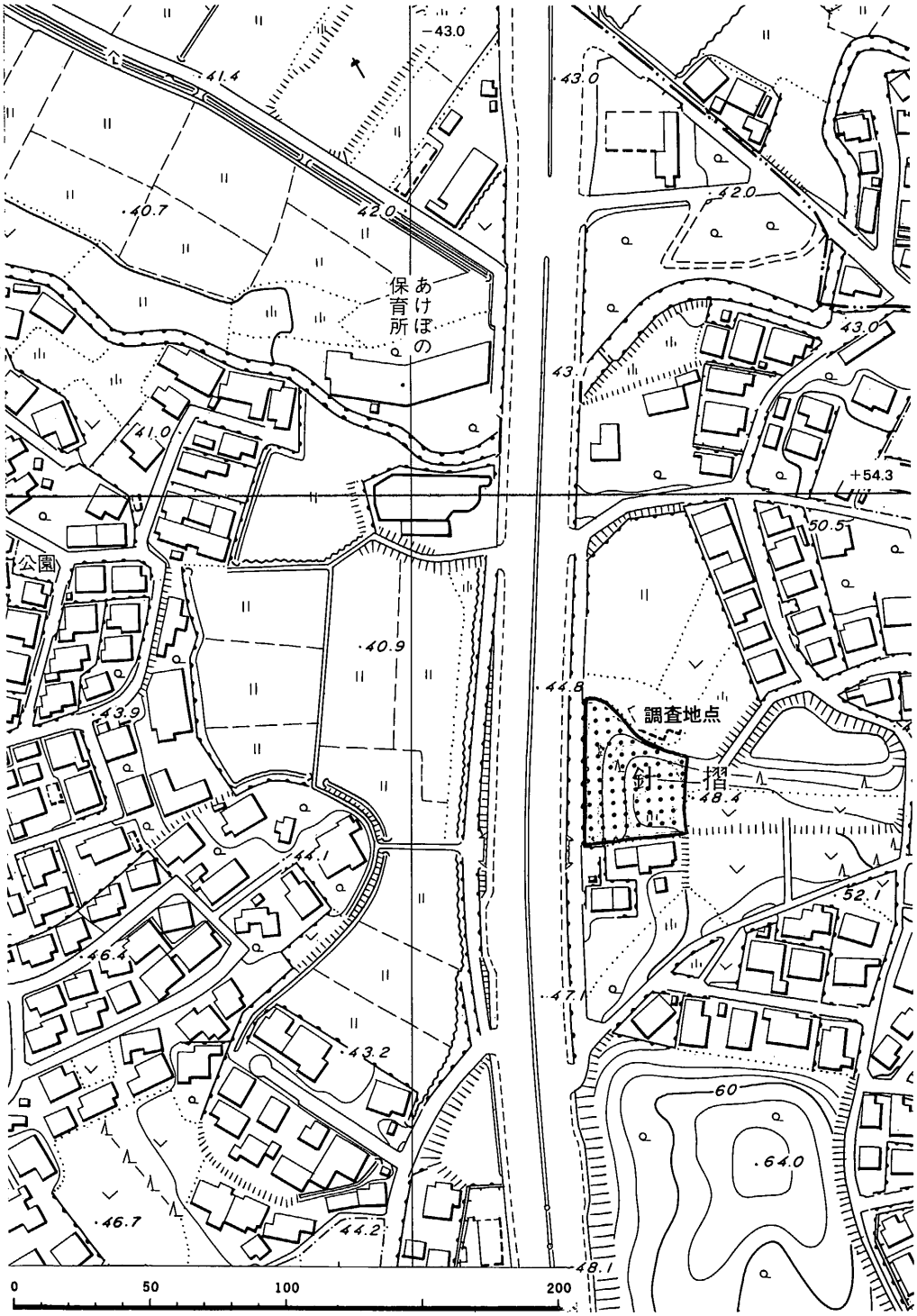


Fig. 2　調査地点位置図（S 1 /2,500）

Ⅰ．調査に至る経過

平成５年３月22日に申請者木原宗道氏より遺跡の有無の照会があり、協議の結果、試掘調査による確認が必要な旨伝えた。同年４月５日試掘を行ない、遺跡の存在を確認。申請者に工事着手前に発掘調査の実施を行なう旨の県教育委員会よりの通知を伝えた。これをうけて木原氏と協議をもつが、発掘調査は木原氏の緊急を要する事情があるため、内部で協議を重ねた結果現在進行中の調査が終了しだい、当該地の調査を実施することとし、その旨を申請者に伝えるとともに発掘調査の実施について協議を行なった。平成５年７月２日付で埋蔵文化財調査委託契約書を締結し、同年７月15日より発掘調査を開始した。

調査組織

総括	筑誘野市教育委員会	教育長		永渕正敏
庶務	筑紫野市教育委員会	教育部長		永田晋一
		社会教育課	課長	黒田未宣
		文化財担当	係長	山野洋一
			技師	渡邊和子
試掘調査			技師	草場啓一
発掘調査			技師	渡邊和子

Ⅱ．位置と環境（Fig.１・２）

遺跡は筑紫野市大字針摺539-12 に所在する。

遺跡の所在する丘陵は、東に三郡山塊、西に背振山塊が接近し平野がせばまる所に位置する。

またここは福岡平野と筑後両平野の分水地点でもある。この丘陵の東側には三郡山塊のひとつである宝満山を源とする宝満川が、ほぼ南北に流れる。この宝満川流域には数多くの遺跡が遺存する。この丘陵部もそのひとつで、平野部からの比高おおむね10ｍを測る。北側に高尾川が流れ、その南は山口川に面している。この丘陵は野黒坂丘陵と呼ばれ、旧石器時代の遺物や弥生・古墳時代の集落址のあった野黒坂遺跡[註1]と同一丘陵上の北端に位置する。

周辺の遺跡を概観すると、北に0.2㎞の所に古墳時代の集落址である大曲り遺跡[註2]、北西0.8㎞には弥生・古墳時代の集落および甕棺群や古墳群の確認された吉ケ浦遺跡、東側0.4㎞には上ノ浦遺跡[註3]、東南0.7㎞は旧石器時代から古墳時代の遺跡のあった峠山遺跡[註4]が、さらに南に1.5㎞の所には弥生時代の住居跡・大溝などの検出された常松遺跡[註5]が所在する。南西１㎞には弥生時代の甕棺墓群で著名な永岡遺跡[註6]もあるなど、古代から生活環境としては最適地であったことを窺わせる。

また宝満川流域には宝満川のつくる沖積地が広がり、その東側の背振山塊より派生する低丘

陵に入り込んだ小谷は、古代より水田地として使用されたものと考えられる。

特に永岡遺跡や峠山遺跡、野黒坂遺跡の所在する丘陵群は開折が進行しているとはいえ、県下でも数少ない洪積世段丘によって形成されている。

このように旧石器時代から現代まで、この周辺は生活環境の最適地であり数多くの遺跡の存在することからも実証される。

註1・2 『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告書』第1集　福岡県教育委員会

註3 『上ノ浦遺跡』　筑紫野市文化財調査報告書　第14集　筑紫野市教育委員会

註4 『峠山遺跡』　福岡県文化財調査報告書　福岡県教育委員会

註5 『福岡県筑紫郡筑紫野町野常松遺跡調査報告書』 別府大学文学部考古学研究報告書1

註6 『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告書』第4・5集　福岡県教育委員会

Ⅲ. 調 査 の 内 容

調査区は試掘時の所見によれば、遺構の不連続が認められる北側とやや遺構の連続する南側に分けられる。機械搬入後、北側部分のトレンチを拡張し、さらに精査の結果、遺構の不連続を再確認するとともに北側部分を排土置場として、南側部分のみを調査対象地としてしぼり丘陵頂部から道路直上の石垣近くまでを全面剝土した。排土中より、古墳時代の遺物が検出され野黒坂遺跡の1次調査同様斜面部に住居跡の営まれているのを想定した。

検出した遺構は、住居跡1軒、調査区全域に多数のピット群、土壙1基、貯蔵穴1基である。

検出されたピットの一部には掘方として、しっかりしたものも見受けられたが建物跡としてまとまりのあるものは検出できなかった。

1. 住居跡（Fig. 3、PL. 2）

斜面の中央、調査区境界線上近くで検出した。プランの確認できた東壁は一辺を3.3m、壁高22cmを測る。床面には最厚10cmの貼床が認められた。柱穴は貼床の下に2個検出され、共にほぼ径30cm、深さ40cmを測り、柱穴間の距離は1.8mとなる。西壁の確認はできなかったが、斜面上に柱穴間約2mで直径・深さともに推定位置に近い柱穴が検出されていたので、これをこの住居跡の残りの柱穴と考えた。この柱穴間の距離から推定すると西壁は4m前後の所であったと思われる事から、この住居跡はやや隅丸気味な長方形プランであると考えられる。

出土遺物（Fig. 4、PL. 5）

1は埋土中から出土した、黒曜石製のペンナイフ。長さ2.8cm、巾1.2cm、厚さ0.6cmで先端が僅かに欠損。基部に大まかなリタッチが施されている。縦剝ぎの剝片が素材である。

2は焼成のややあまい須恵器の坏身。胎土は精製されているが立ちあがりと受部の境がなだ

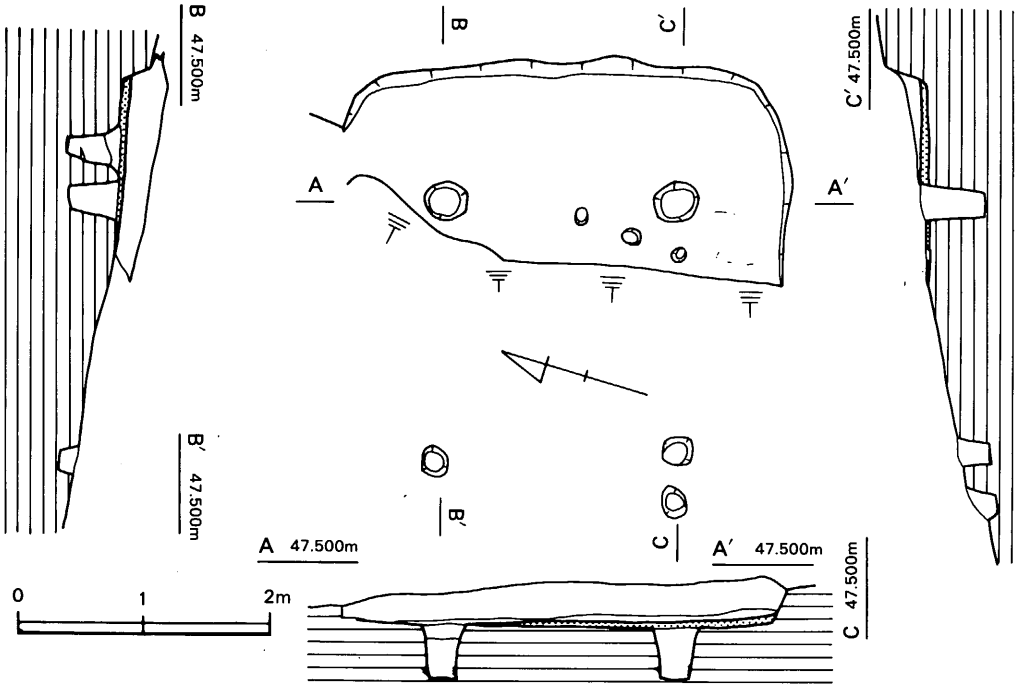


Fig. 3　住居跡実測図（S 1 /60）

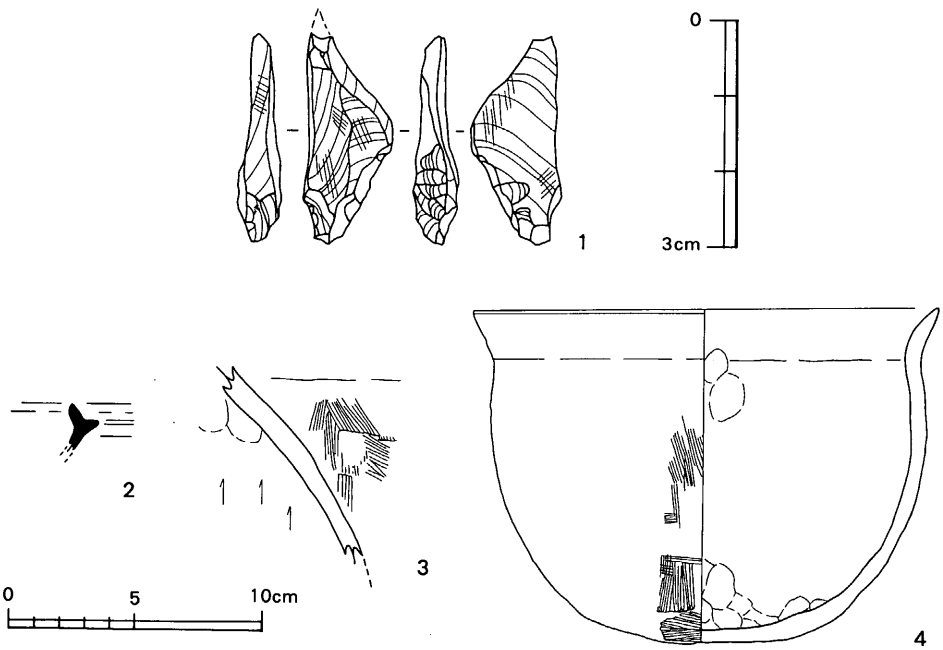


Fig. 4　出土遺物実測図（S 1 / 1 • 1 / 3）

らかな曲線で、境界部の条線が認められない。3 は甕の頸部付近で内面は箆削り、外面はハケで整形され焼成は良好である。4 は弓状に緩やかに外反した口縁部と、張りが弱く口縁部径とほぼ同じ大きさを有する体部をもつ。体部外面は細いハケで調整。内面は指による削りにて整形するが、指頭痕が顕著である。2 ～ 4 は共に床面からの出土。

2．その他の遺構（Fig. 5、PL. 3・4）

1 は底面径1.3mのほぼ円形の貯蔵穴で、遺存状況が悪く壁の立ちあがり最深部20cmで胴部・上部の形状は不明。2、底面がやや角ばり、ほぼ円形のプランを呈すピット21 で径80cm、深さ70cmを測る。3 のピット20 は深さ60cm、70cm×80cmの長方形を呈す、上部は木の根の攪乱によりやや不整形になっている。4 は不整円のピット22で、径80cm、深さ55cmを測る。5 は斜面の下端で検出されたピット13 で、一辺が85cm×70cmを測る長方形プランを呈する柱穴で、深さは25cm。埋土には灰がつまっていたが、壁などの焼けた様子はなく、いわゆる焼土壁をもつものと

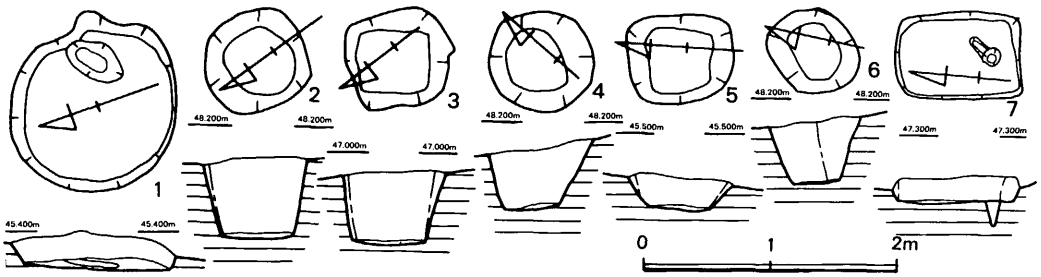


Fig. 5　その他の遺構実測図（S 1 /60）

は別のものであろう。この柱穴周辺のピットには、焼土や灰のつまったものが多く見受けられたが、何らかの関連性を意味づけるか否かは現況では明確になしえなかった。6 はピット13の近くにあるピット11で、隅丸方形を呈し70cm×60cm、深さ50cmである。埋土には灰やスサ入り粘土を含んでいた。7 は 1 号住居跡の近くで検出された長方形の小型土壙で、100cm×65cm、壁の遺存は悪く20cmしかなく、床面上に径15cm、深さ30cmの小ピットを有する。埋土には灰が多く混っていた。

調査の内容でも述べたように柱穴と考えられるものの中には、大きさ・深さなど掘立柱建物を彷彿させるものがあったが、現況では建物跡としてまとまりのあるのは見いだせなかった。

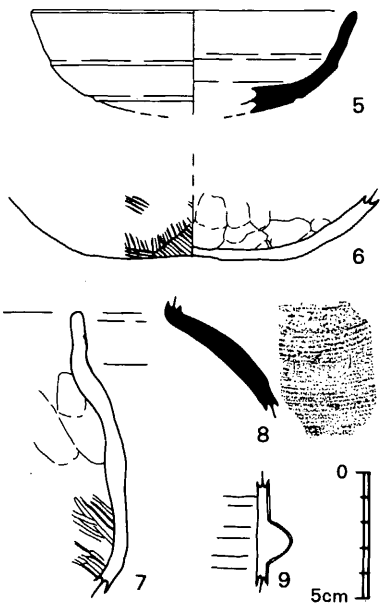


Fig. 6　出土土器実測図（S 1 / 3）

出土遺物（Fig. 6、PL. 5・6）

遺物は細片が多く図示しえたのは次の5点である。

5～7はいずれもピット9出土。5は脚部を欠損する無蓋の高坏で、復原径12.8㎝、現器高4㎝を測る。焼成は良好であるが、胎土には大粒の砂が含まれる。内外の調整はナデ・ヨコナデで丁寧に仕上げている。6は甕の底部片で平底である。器表外面に二次加熱による赤変・煮こぼれによる附着が認められる。外面はハケ目・内面は指頭による調整を施す。7、外面の器表は著しく磨滅しており調整は不明瞭だが、ハケ目調整の痕が僅かに残る。さらに二次加熱の影響と思われる赤変が見られる。内面の頸部屈曲部は指による整形、胴部はハケ目。8は提瓶の破片。焼成は良好。外面はカキ目が残る。内面は丁寧なナデ調整が施されている。

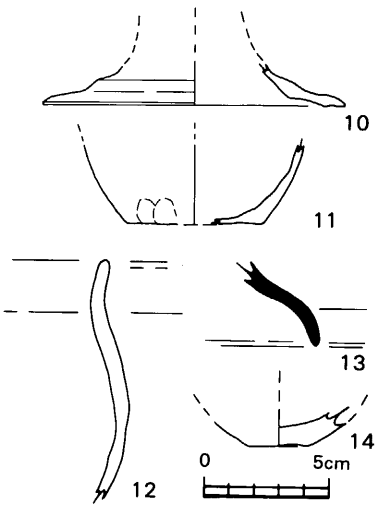


Fig. 7
包含層出土土器実測図（S 1 / 3）

3．包含層の遺物（Fig. 7、PL. 6）

10は器表の磨滅の著しい高坏の裾部で調整は不明。胎土は精製され焼成は良好である。11・14はミニチュア土器で、11の外面は粗いハケ目、内面は指頭整形の後ナデで仕上げている。器壁は薄く平底である。14の外面は二次加熱の影響による赤変が見られるが、磨滅のため調整は不明。内面は指頭整形の後、丁寧なナデで仕上げている。11・14ともに胎土には細砂粒が含まれる。12は内外面ともに磨滅が著しく調整は不明。淡褐色～淡橙色を呈し、胎土には細砂粒を僅かに含む。口縁部は弓状に緩やかに外反、張りが弱く口縁部径よりやや大きな体部をもち、外面に二次加熱による赤変が見られる。13は須恵器の坏蓋の破片で、胎土には細砂粒が多く含まれ内外面共にナデ調整が施されるが雑なつくりである。

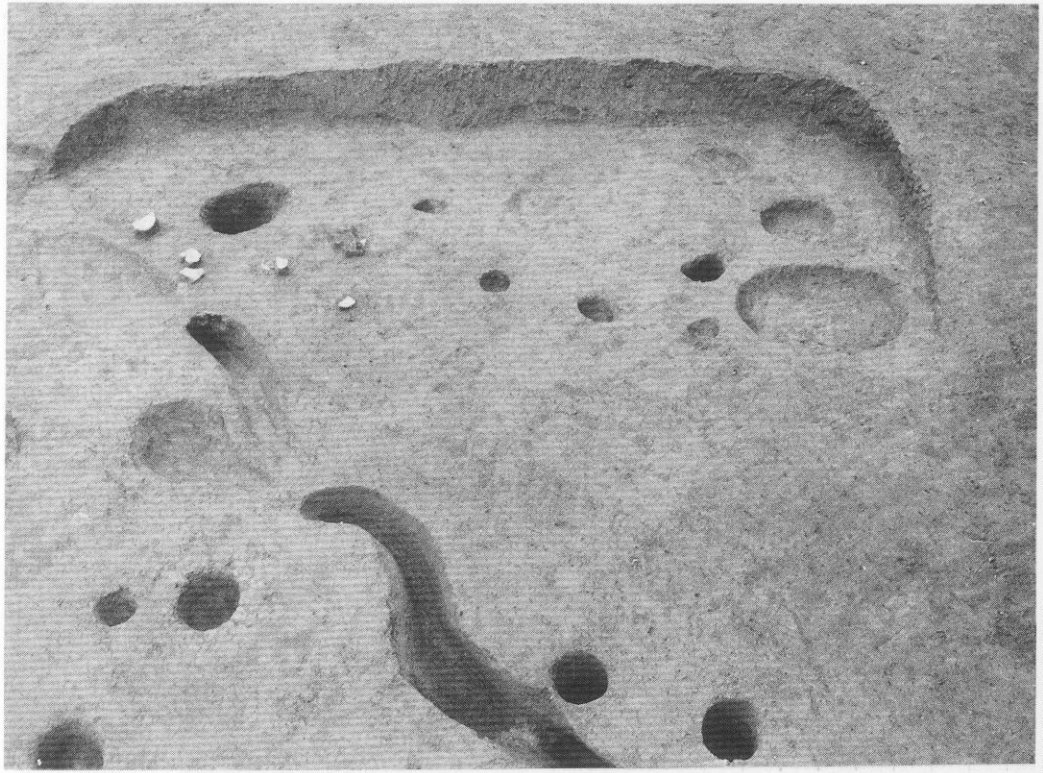
Ⅳ．ま　と　め

野黒坂丘陵の斜面部における住居跡のあり方は、先の報告書によれば北側にいくほど住居跡自体の数も減少して、弥生時代の遺構なども皆無の状態である。

今回の調査地点は丘陵の最北斜面にあたり、調査の内容でも述べたように北側にいくほど遺構は不連続であり、減少している。南側は柱穴など多数検出したものの住居跡は、南側の隣地付近で一軒だけである。また弥生期の遺物の出土もみない。このことから、斜面部での古墳期における集落の北限を1号住居跡付近としておきたい。

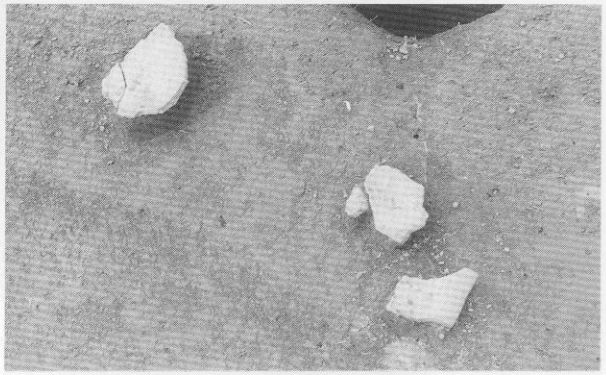
図　　版

PL.1 全 景 写 真



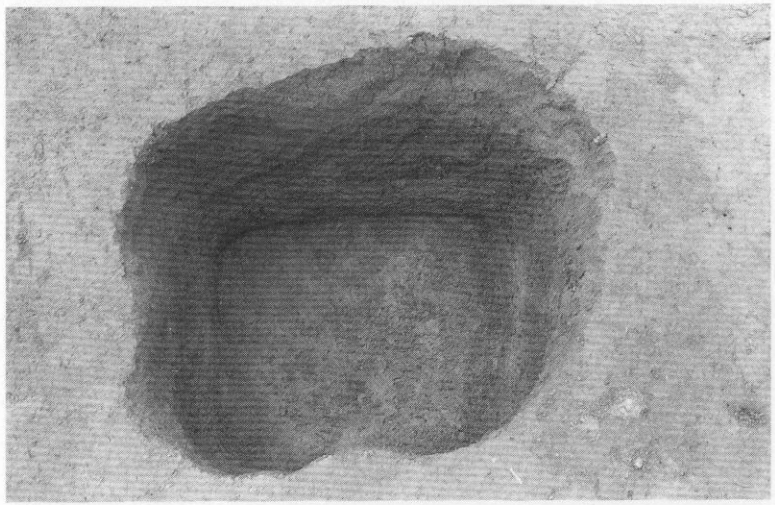
1号住居跡

近　景（北西より）

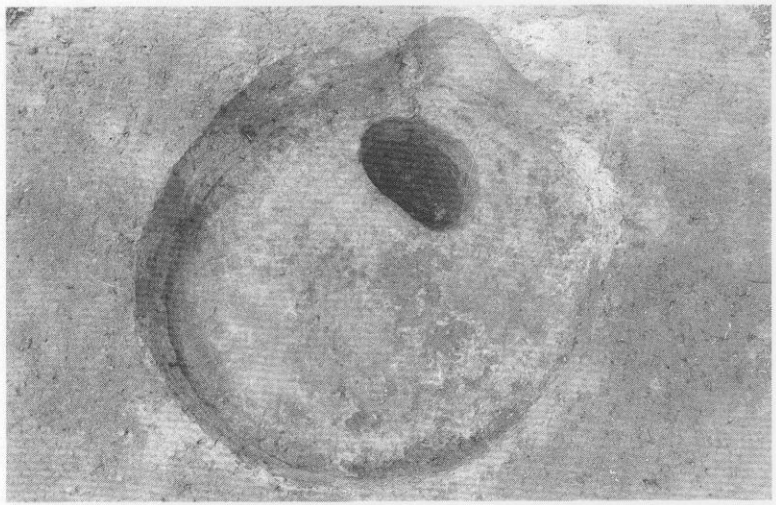


住居跡遺物出土状況

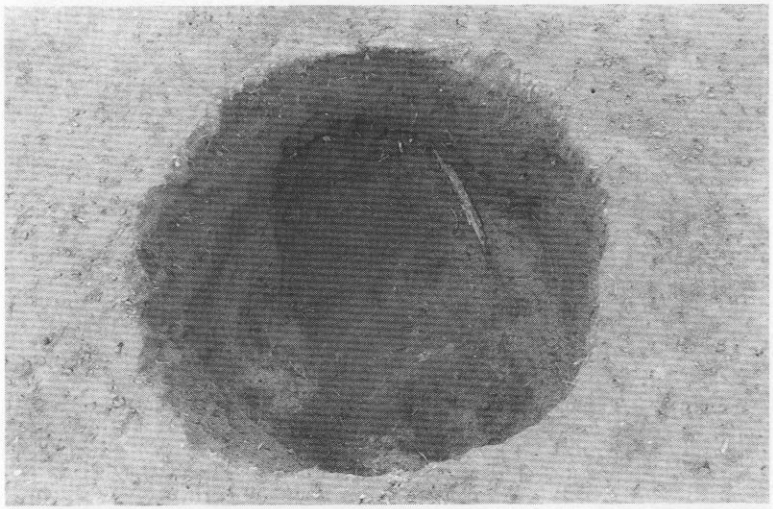
PL. 2　ピット群近景および住居跡



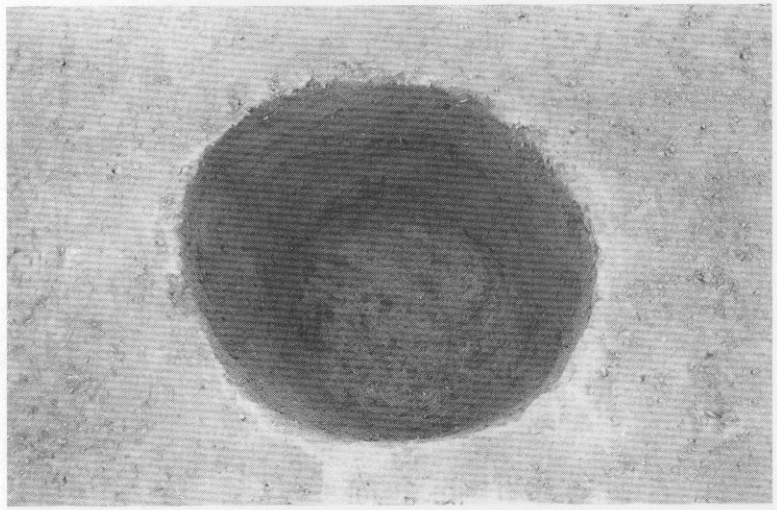
ピット20



1号貯蔵穴

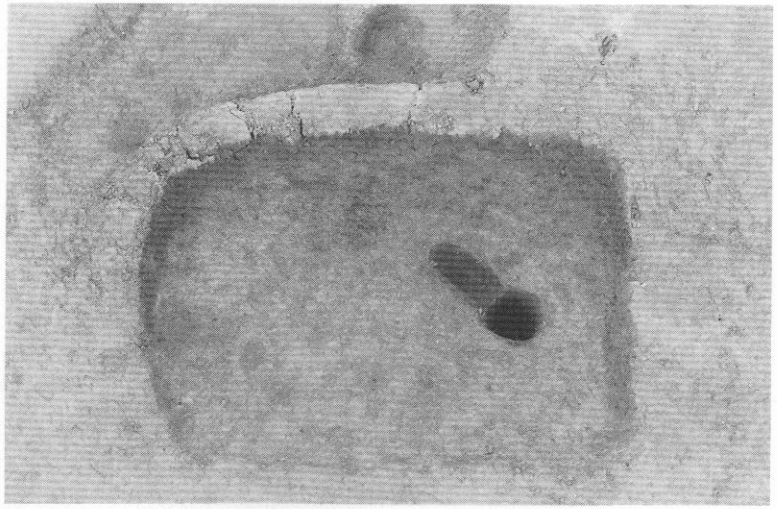


ピット22

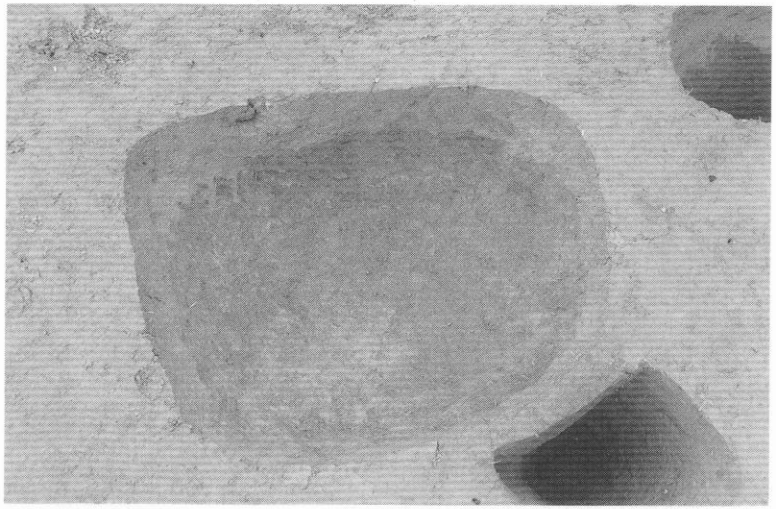


ピット21

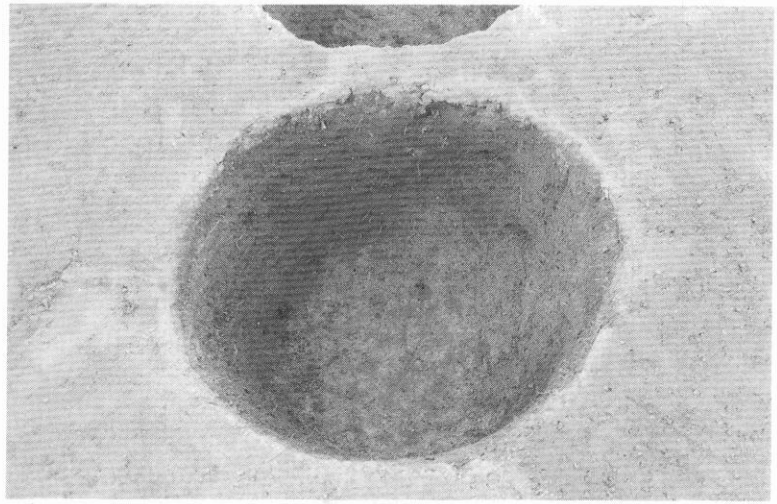
PL. 3　その他の遺構



1号土壙

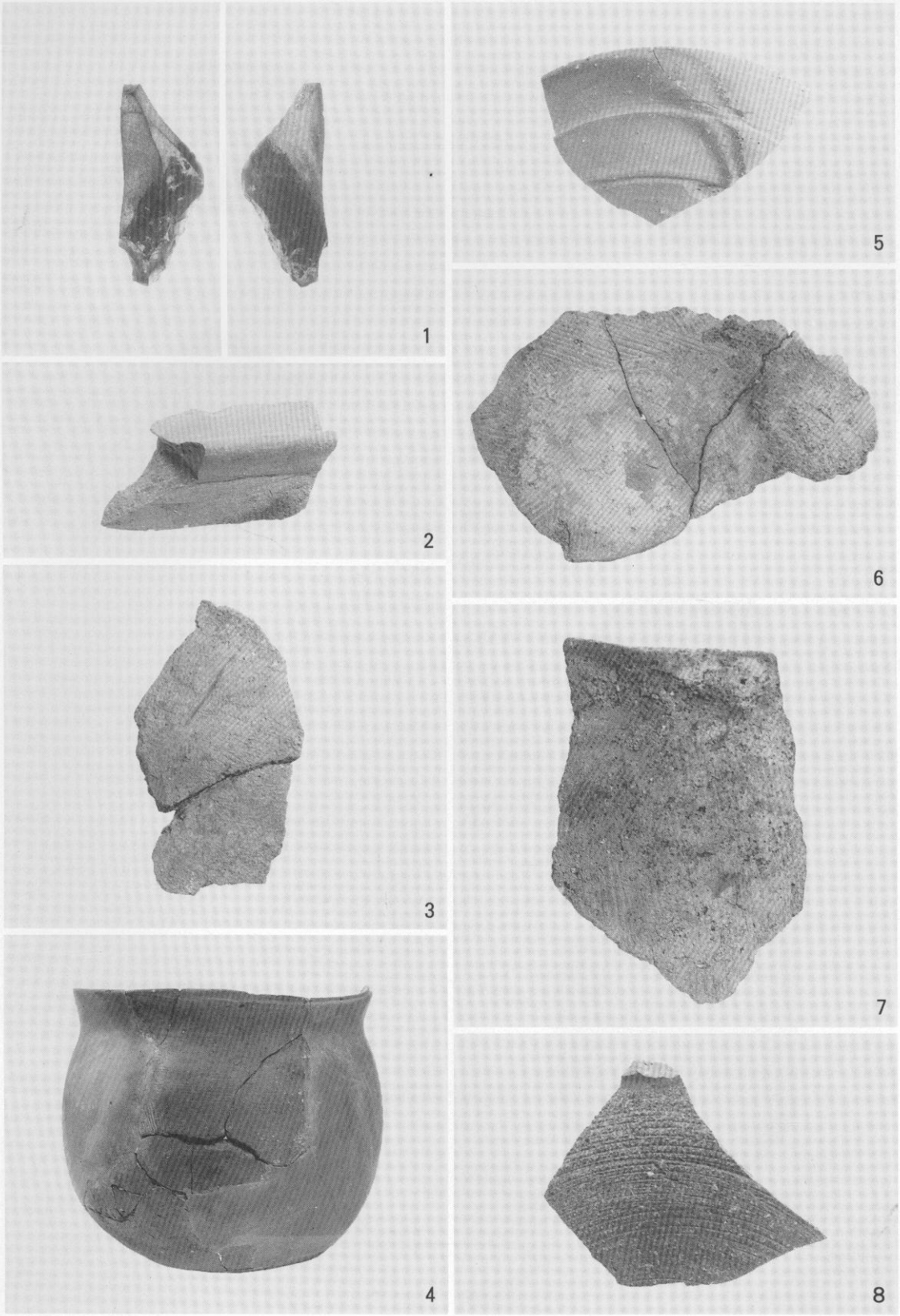


ピット13

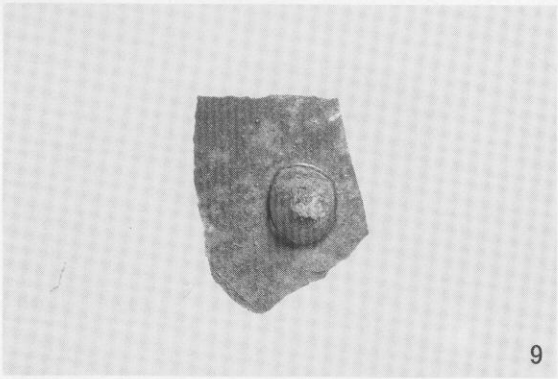


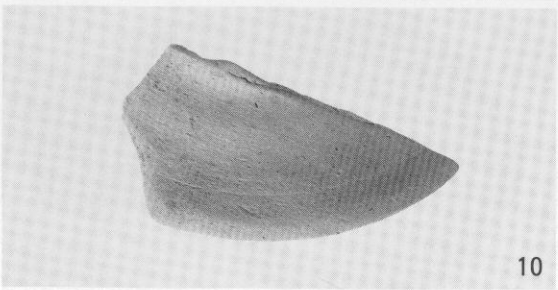
ピット11

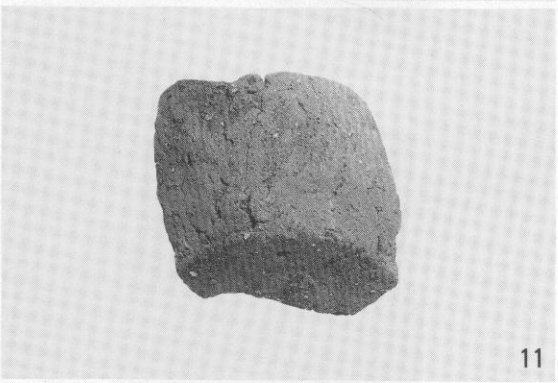
PL. 4　その他の遺構

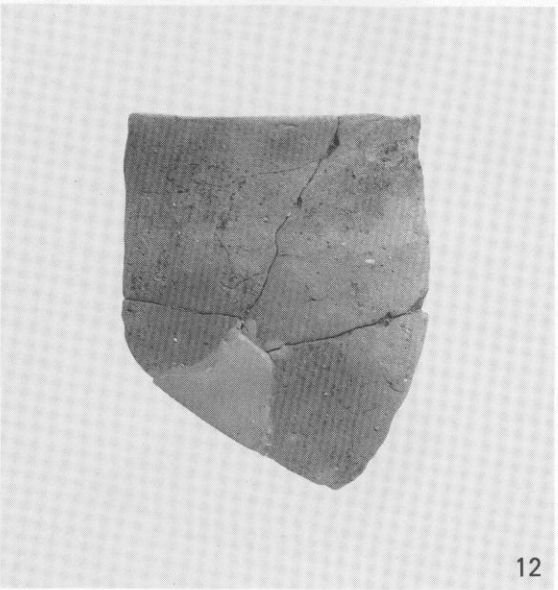


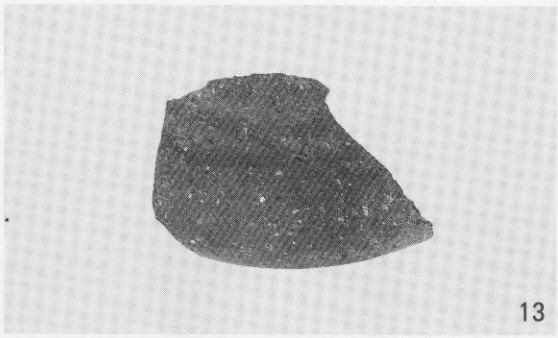
PL. 5　出土遺物

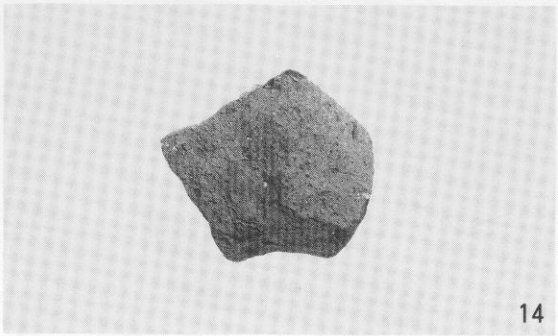












PL. 6　出土土器

あ と が き

あわただしくすごす毎日の生活。あまりにも便利になりすぎた日常生活。このような生活の中で、どれだけの人達が身近かなところで生きている古代に気づいているでしょうか？

古代から語りかけられるメッセージには、私達の未来の繁栄にヒントをあたえてくれるものが必ずあるはずです。

過去あっての現在・未来、ともすれば忘れがちな古代への感謝。

古代の物言わぬ語り部達のメッセージを、きちんと伝達していくのが私達発掘調査に従事するものの大きな役割だと思います。

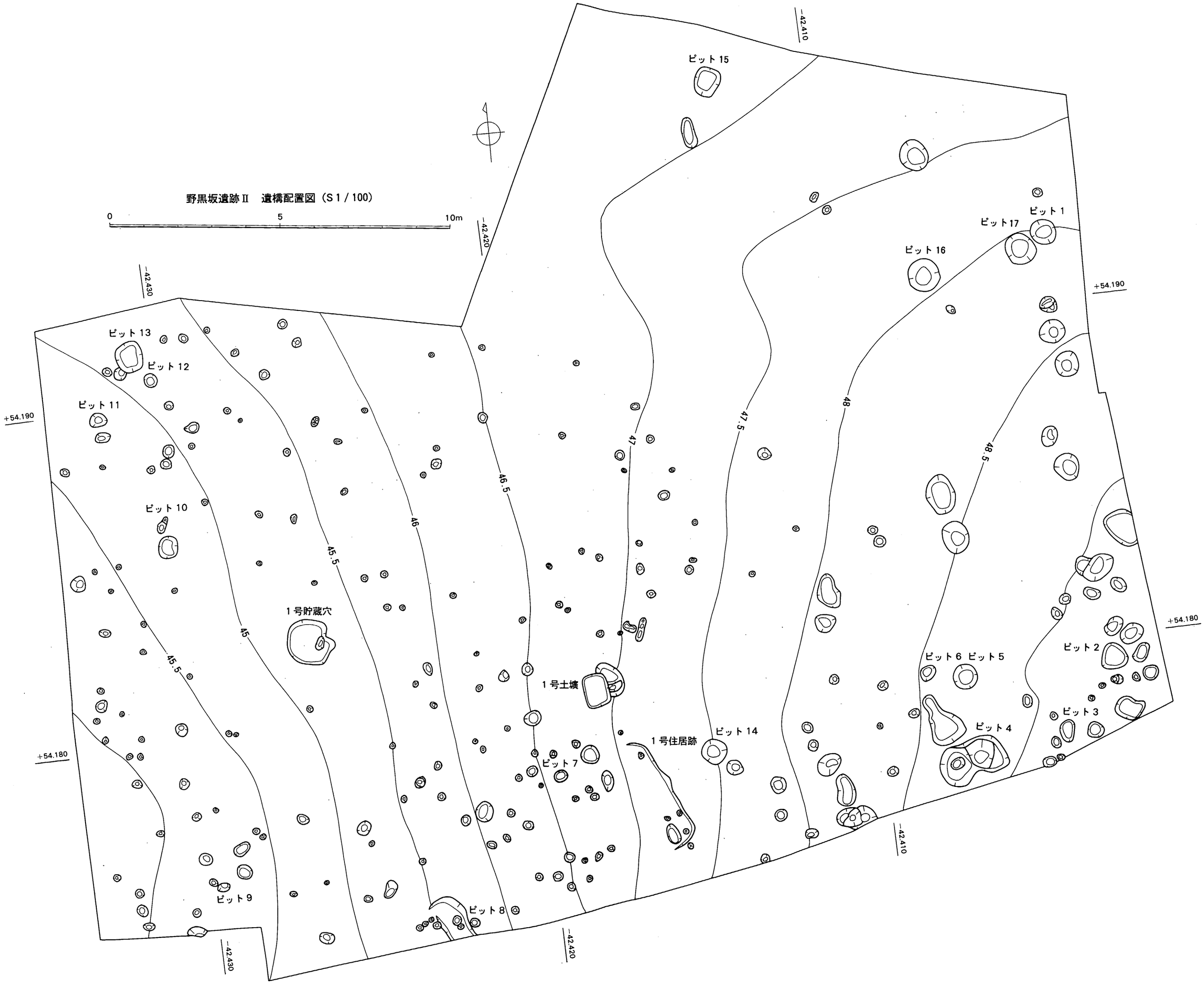
発掘調査から報告書作成まで、短期間ではありましたが無事に辿りつくことができました。

これは調査・整理に協力して下さった皆さまはもちろん、この土地に関わる先人達のお陰だと思います。終了報告するとともに感謝いたします。(K・W)

野黒坂遺跡Ⅱ

筑紫野市大字針摺所在遺跡の調査
筑紫野市文化財調査報告書
第40集

発行　筑紫野市教育委員会
福岡県筑紫野市大字二日市753－1

印刷　株式会社　川島弘文社
福岡市東区箱崎ふ頭6丁目6－41号

野黒坂遺跡Ⅱ　遺構配置図（S 1 / 100）